

■ 講演 演題「2020年、そしてその先の日本のロータリー」 講師 本田博己氏(ほんだひろき)

私は、かつて「四大奉仕」(今では「五大奉仕」になりましたが)の中でも「職業奉仕」は、具体的な奉仕活動を伴う他の奉仕部門とは違い、奉仕の理念の職業への適用を謳うた「ロータリーの目的」の第2項目に通じる、他の奉仕部門の上位概念のようなものではないかと思っていました。「四大奉仕」の一部門に収まっていること自体がおかしいと。

しかし、どうやら日本以外(?)の世界のロータリーでは、当然のように「職業奉仕」を他の奉仕と並び、一つの奉仕部門(an Avenue of Service)として位置付けているようです。

「五大奉仕部門」の定義が、国際ロータリー(RI)(第6条)定款や細則には掲載されず、標準ロータリークラブ定款にだけ示されているのは、それが、その定義の前文で明記されている通り「個々のロータリークラブの活動のための枠組み」(framework for the work of this Rotary club)であるからです。そこには、ロータリークラブ会員が各奉仕部門で行うべき行動・活動が示されています。

第一部門の「クラブ奉仕」では「行動」、第三部門の「社会奉仕」では「取り組み」、第四部門の「国際奉仕」では「クラブの活動やプロジェクト」、第五部門の「青少年奉仕」では「活動」、「プロジェクト」、「プログラム」などという言葉で、具体的に会員やクラブに行動を求めています。

ところが、第二部門の「職業奉仕」は、これまで、記述が他の部門とは明らかに異質でした。クラブの活動の枠組みであるはずの「奉仕の第二部門」としての説明が欠落していたのです。しかし、2016年の規定審議会で「制定案16-10 奉仕の第二部門を改正する件」が採択され、標準ロータリークラブ定款第5条の奉仕の第二部門である職業奉仕の定義に、アンダーラインの部分が追加されました。

第6条 五大奉仕部門

2. 奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。

これで、「職業奉仕部門」も含めて5つの奉仕部門すべてが、クラブの活動の枠組みであることが明確になりました。

VTT(職業研修チーム)も「職業奉仕」!

日本のロータリーで言い習わされている「職業奉仕」という言葉と、RIが考える「職業奉仕」の違いがはっきりわかる例として、『手続要覧』に記載していた「職業奉仕月間」の解説を見てみましょう(『2013年 手続要覧』P 89)。

職業奉仕月間 (Vocational Service Month)

毎年10月(*2015-16年度から1月に移動)の「職業奉仕月間」は、クラブが職業奉仕の理念を日々、実践することを強調するための月間である。この月間中に推奨されるクラブ活動には、地区行事でのボランティアの表彰、ロータリー親睦活動への参加の推進、職業奉仕活動またはプロジェクトの実施、未充填の職業分類に焦点を当てた会員増強の推進などが含まれる(『ロータリー章典』8.030.3.)。

いかがでしょうか。「こんなものは職業奉仕ではない!」というベテラン会員の声が聞こえてきそうです。地区やクラブの「職業奉仕委員会」の委員長や委員に任命された方は、シニアリーダーが伝統的に語ってきた「職業奉仕」論とRIが提示する「職業奉仕」とのあまりの違いに困惑したことがあるかもしれません。

ロータリー理念の根底に「職業奉仕」を位置付ける日本の伝統的議論とは異なり、RIが示す「職業奉仕」は、クラブの活動の枠組みである五大奉仕部門の一つとしての「職業奉仕部門」なのです。

世界のロータリーでは、ロータリー財団のグローバル補助金を使って行うVTT(職業研修チーム)も立派な「職業奉仕」の活動として認識されています。(『友』2013年11月号横組みP 35~42「GLOBAL OUTLOOK

ロータリアンのための職業奉仕入門、『The Rotarian』2013年11月号P 63~70参照)

世界のロータリーでは、自分の職業上のスキルを生かした奉仕活動は、個人が行うものであれ、クラブが行うものであれ、すべて立派な「職業奉仕」の活動として活発に実践されているのです。

「職業奉仕」という言葉で、世界のロータリアンは、奉仕部門の一つとしての職業奉仕の活動を語り、日本のロータリアンは、「奉仕の理念」の職業への適用や自分自身の職業観を語る。このズレを解消できないでいることが、大げさに言うと世界のロータリー運動の中で、日本のロータリーの「ガラパゴス化」を招いている一因のように思えます。

日本の「職業奉仕」論は、「職業倫理」論

日本の「職業奉仕」論がすべて間違っているとは言っているわけではありません。

日本のロータリアンが得意な「職業奉仕」論は、世界では「(職業)倫理」(Vocational) Ethics」というテーマで論じられています。ロータリーは、職業人の集まりというその成り立ちから、昔も今も職業倫理を大事にし、強調する集団であることは間違いありません。

1915年に制定された「道徳律」(「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」)は、当時、多くの業界で職業倫理の向上に大きく寄与しました。現在の「ロータリーの目的」(RI定款第4条、標準ロータリークラブ定款第5条)の第2項には、「職業上の高い倫理基準を保ち、……」と謳うたわれています。4か条からなる「ロータリーの行動規範」の第1条には「個人として、また事業において、高潔さと高い倫理基準をもって行動する。」とあります。

ジョン F. ジャームRI会長は、就任前のインタビューで、「全てのロータリアンが持つべき、中核となる資質と人格とは、どのようなものでしょうか?」という問いに、「最も大切な中核的価値観は『高潔性』“integrity”です。高潔性がなければ何も無いのと同じです」と答えています。(『友』2016年3月号横組みP 22~25「約束を守り抜く人 国際ロータリー会長エレクト ジョン F. ジャーム氏に聞く」)

高い職業倫理感を持った高潔な人格がロータリアンには求められます。日本の伝統的な「職業奉仕」論はこのことを強調しているのだと思います。

私の提案:「奉仕の理念」を語ろう

日本のロータリアンと世界のロータリアンが語る「職業奉仕」が違うことを認識している方は多いかもしれません。ただ、その違いを、日本の「職業奉仕」の理解の方が正しいとしたり、「職業奉仕」は他の奉仕部門とは違うとして、クラブの「職業奉仕」の活動を否定したりする態度は、間違っていると思います。

私の提案は、「職業奉仕」という言葉で「奉仕の理念」(の職業への適用)や自分の職業倫理観を語ることをいったんやめてみたら、ということです。

そして、クラブの活動のための枠組みである「五大奉仕部門」(Five Avenues of Service)の第二部門(second Avenue)である「職業奉仕部門」の活動だけに「職業奉仕」という言葉を使ってみたら、という提案です。

「職業奉仕」という言葉ではなく、世界共通の「奉仕の理念(奉仕の理想)」(The Ideal of Service)という言葉で、ロータリー